

言語文化論集 第44号 抜刷
1997年1月31日

ヘテロトピアのまなざしと制度の身体

廣 瀬 浩 司

筑波大学 現代語・現代文化学系

ヘテロトピアのまなざしと制度の身体

廣瀬浩司

1. ヘテロトピアのまなざし

1967年、ミシェル・フーコーは『他の空間』という講演のなかでヘテロトピア (hétérotopie) の概念を提唱し、空間論・都市論のあらたな方法論を模索している。ヘテロトピアとは、ユートピアに対立するものである。ユートピアが「実在的な場なき場所」であり、本質的には「非実在的な空間」であるのにたいして、ヘテロトピアとは「実際に位置づけることができ (localisable)」、現実の社会制度のなかに輪郭を描くことができるようなものである¹⁾。このように実在的でありながら、ヘテロトピアは他のすべての場所と関係し、その関係を宙づりにし、中和化し、さらには逆転しさえする。ユートピアのように空間を超越したものではないのにもかかわらず、一種神話的な異化効果を持つ「他なる場所」——たとえば監獄、墓地、植民地など——、それがヘテロトピアなのである。

1967年という日付に注目するならば、この概念が当時の実存主義的・マルクス主義的な歴史概念への批判として導入されていることは、容易に推察されよう。単線的な時間の流れとしての歴史概念は、本質的に19世紀的な概念であり、今日のわれわれにとって重要なのは、同時性・隣接・近さと遠さといった空間的な関係だというわけだ。むしろフーコーは、歴史哲学に構造主義的な空間観を対立させて満足しているわけではない。問題は時間や歴史を否定することではなく、それらを扱うあらたな方法を模索することなのである。

この視点からフーコーは、ヘテロトピアの記述 (彼はそれを「ヘテロトポロジー」と名付けている) の原則を、具体例を挙げながら列挙していく。それはたとえば1975年の『監視することと処罰すること (邦訳名『監獄の誕生』)』において実践されていくことだろう。

だが我々がここで注目したいのはこの記述そのものではなく、フーコーがユートピアとヘテロトピアの関係を説明しようとする過程で提示している、鏡の空間とのアナロジーである²⁾。彼によれば、鏡こそ、ユートピアとヘテロトピアのあいだの混成的な空間、境界の空間を表象するものにほかならない。

ある意味では、鏡はユートピアを表象する。鏡の表面の背後に広がる空間は、まさに場所なき場所であり、そこに映る自己の像は、あくまで投影された現実の影にすぎない。鏡像は「私が不在である場において、私を見ることを私に可能にする」ような、一種のユートピアなのである。

だが、鏡はヘテロトピアでもある。鏡そのものが実在的であるからだけではない。鏡に映る不在の自己の像そのものが、現実の自己にたいして反作用を及ぼしてくるからだ。鏡像によって私は、「私はそこ(là-bas)に私を見るのだから、私は自分がある場所において不在であることを発見」する。おのれの不在を発見したとき私は、「いわば私に向けられたまなざし」から出発して、私自身のいる場に立ち返り、それを再構成することを強いられるのだ。ユートピアと見えた自己の鏡像から発せられるまなざしは、自己にとって一種不気味な他者として現れてくる。これをヘテロトピアのまなざしと呼ぶことにしよう。

このように鏡とは、自己の投影像としてのユートピアと、それを通して現れてくるヘテロトピアの二重体を表象する。この分析ははたしてどのような意味を持つのだろうか。

ところで、この分析は、フーコーが影響を受けたことが確実な、二人の思想家を想起させずにはいない。第一は、鏡像段階の理論で知られるジャック・ラカンの精神分析理論である。ラカンの理論はまさにサルトルの批判として登場し、構造主義的な自我論・空間論を打ち出したものであり、フーコーの発想の直接の源となったことであろう。もう一人は、実存主義者として出発しながら、サルトルやマルクス主義の歴史論をきびしく批判するに至った³⁾、モーリス・メルロ＝ポンティである。彼は晩年に、自己と鏡のイメージとの関係は「根源的な構造」であると述べ、身体の「根源的なナルシズム」⁴⁾について論じている。

この二人の思想家は、一方は構造主義者、他方は実存主義者として活動したにもかかわらず、実は同世代であり、相互に影響を与えている。上記のフーコーの分析は、まさに両者の思想が交叉する点に位置づけることができるのではないだろうか。この交叉点を浮き彫りにするため、メルロ＝ポンティが熟読した最初期のラカンの論文を手がかりに、鏡像論の哲学的な意味をさぐっていくことにしよう⁵⁾。

さて、メルロ＝ポンティがラカンを直接論じているのは、1949年から1952年までソルボンヌで行っていた講義においてである。そこで彼は、ラカンの『家族』についての最初期の論文の前半部と、いわゆる『鏡像段階』論を注釈して

いる⁶⁾。ラカンはどちらの論文でも鏡像の意義について論じているが、本稿ではそれがより広い文脈に置かれている『家族』論文の構成にしたがって論述をすすめていくことにする。

『家族』論文でラカンが示す第一の主題は、家族組織というものが生物学的な要因によって説明されない文化的・社会的な組織であるということである。純粹に生物学的・本能的な結合を起源に置き、それを原初的な家族と考える仮説は社会学的に実証されない。起源においてすでに一定の禁止と法とが存在していたし、そもそも純粹に本能的とされる動物社会においてさえ、ある種の「社会性」を論じることができる。(FM, 40-4)その意味で家族とは、自然と文化、本能と社会を媒介する、ひとつの「制度(institution)」なのである。

ラカンによれば、家族という制度を記述するのに非常に有効なのが、コンプレックスとイマーゴというフロイトの概念である。コンプレックスとは、病的な成長のみにかかわるものではなく、行動のもっとも安定した要素として、心的な発達の弁証法の動力となるものである。そしてこの弁証法において根源的な役割を持っているのが、無意識の表象としてのイマーゴである。

ラカンは、イマーゴに基づいたコンプレックスの弁証法的な発達の過程を、「離乳コンプレックス(complexe du sevrage)」「侵入コンプレックス(complexe de l'intrusion)」「エディプス・コンプレックス」の三段階にわけて説明している。鏡の問題が顕在化するのには「侵入コンプレックス」においてであるが、問題の萌芽はすでに「離乳コンプレックス」に見られる。そこで本論では、はじめの二つのコンプレックスについて問題点を整理し、同時にメルロ＝ポンティ思想との突き合わせをおこなうことにしよう。

2. 離乳コンプレックスと母のイマーゴ

離乳コンプレックスにおいて重要な役割を演じるのは、母親のイマーゴとの関係である。母親のイマーゴは、内容的には「幼児期に固有の諸感覚によって与えられ」、「対象の形態の到来に先立つ」一種のカオスである(FM, 40-6)。幼児の母との関係にはまだ能動と受動の区別はなく、吸う存在が同時に吸われる存在であるかのような世界が展開しているため、離乳コンプレックスは「融合的で発話以前の(ineffable)カニバリズム」として発現する。

この段階ではまだ自我のイメージは形成されておらず、いわゆるナルシズムについて語ることはできない。だが、すでに価値認識の萌芽を確認するこ

とはできる。離乳は幼児にとって一種の心理的な外傷体験であり、幼児はそれを受容するか、しないか、というかたちで反応するのだ。もちろんこの時期には意識的な選択をおこなう自我はないのだが、それでも離乳の受容と拒否は、幼児の価値認識に両価性(ambivalence)を与えるものなのである。

ラカンによれば、この母のイマージの不在の経験こそ、フロイトが「死の本能」と呼んだものに関係している。死をひとつの(食)欲(appétit)の対象とすること、これは母親のイマージの探索にほかならない。家族という制度は、この欠如を「昇華」することにおいて成立する。しかしその痕跡は残存し、それは文化的世界において「全体のノスタルジー」(FM, 40-8)としてあらわれる。普遍的な調和という形而上学的な幻想や、情動的な融合という神秘主義、全体主義的な保証を求める社会的なユートピア論などは、この全体のノスタルジーの文化的なあらわれだというわけである。

このラカンの分析は、メルロ＝ポンティの晩年の思索と直接に関係していると思われる。メルロ＝ポンティはこのような能動と受動、自己と他者の区別なき感覚的な次元のことを「肉(chair)」と呼んでいたからだ。「肉＝私の身体が受動的－能動的(見えるもの－見られるもの)であるという事実」⁹⁾。彼がここで肉と呼んでいるのは、母子の自然的な関係をモデルにした「間身体的な(intercorporal)関係」のことであり、そしてメルロ＝ポンティは、母なる「自然の精神分析」を行うことが自分の哲学の最後の課題であるかのような記述さえ残している⁸⁾。

このような発言を文脈から切り離して文字どおりに受け取り、いわばラカンの分析の対象とするならば、メルロ＝ポンティの晩年の哲学は一種の神秘主義であり、母という全体的な存在へのノスタルジーにすぎないことになるだろう。主体は「間身体的な」肉の中に埋没してしまい、そこには他者もない。このような神秘主義的でもあり独我論的でもある哲学によっては、言語的な交通を含めた相互主観的な公共空間は説明できない、というのが晩年のメルロ＝ポンティに向けられるごく一般的な批判である。

だがこのような安直な批判は、まさにメルロ＝ポンティが乗り越えようとした前提の上になされているように思われる。

第一に指摘すべきことは、このような批判それ自体、感覚から言語へ、白他の融合からまったき自我の確立へ、という目的論的な発展を前提としているということである。つまり、感覚的な世界が、他者なき自己中心主義(egocentrisme)(ピアジェ)的な世界である、という発言自体、すでに自他の分裂した世界

の視点からの遡行的な発言であるということだ。しかしながら、感覚的な肉の世界にあっては、そもそも自己も他者もないのだから、それを自己中心と呼ぶことすらできない。それは個体化も数的な区別もない世界であり、それ自体は一でも多でもなく、またどちらでもあるようなものなのだ。

したがって、メルロ＝ポンティの肉の哲学の第一の課題は、いわゆる他我問題を解決することではなく、むしろ問題そのものを変容させる⁹⁾ことによって、自他の差異と同一性そのものの根拠を問うことにある。言い換えるならば、自己と他者というすでに構成された個体同士の関係を分析するのも、それらをカオスに投げ込むことでもなく、カオスと見える感覚的世界への「差異の到来」¹⁰⁾そのもの、すなわち、自他の分節のシステムの発生そのものをとらえることなのである。自他の区別と同一性は、この発生の次元の二つの側面なのだ。

このことを彼は、まさに母子関係をモデルに説明している。「母が苦しんでいる痛みについて、自分をいたわってくれと幼児が母親に頼む」という状況を考えてみる。苦しんでいるのは母なのだが、幼児は一種の移行性(transitivisme)によって、それを「自己」の痛みとして受け取る。その結果「他者」である母親に、いたわりを求めるわけである。メルロ＝ポンティによれば、これは幼児の自己中心性を示すものでもなく、また、愛による両者の融合を示すものでもない。

献身と愛を期待する子どもは、この愛の現実性を証明し、このことは彼によって理解されている。彼は彼なりのかほそく受動的なやり方で、役割を演じているのだ。相互貫入(Füreinander)という一対一の関係において、エゴイズムと愛とが連結(couplage)し、両者の境界が消される。これは独我論を越境する同一化なのだ(・・・)。エゴイズムと利他主義は、同じひとつの世界への所属を土台に存在する。¹¹⁾

母子の相互貫入は、ある間身体的な共通世界の土台の下に成立する。しかしこの土台はけっして与えられたものでも、たんなる刺激でもない。両者の連結はいつでもどこでも反射的に生じるものではないし、誰にでも可能なわけでもない。それは各自がある「役割を演じ」ることによって、そのつど創り出されなければならないひとつの出来事なのである。そのとき幼児は母親を一種の萌芽的な「他者」とみなして自分なりに役割を演じつつ、母と間身体的に交流する。この距離をはらんだ連結(カップリング)の体験が第一次的なものであり、

間身体性とエゴイズム、融合と分裂は、この体験の二つの側面なのだとさえ言えるだろう¹²⁾。

だからこそメルロ＝ポンティは、肉の次元を説明するに際して、それが「帰還 (retour)」すべき起源ではなく、またより上位の層の基盤となるような「第一の層」でもないことを繰り返して強調することになる¹³⁾。肉とは、たしかに「つねにすでにそこにある共通世界であるが、同時にそのつどあらたに作りなおさなければならないような世界のことなのだ。言い換えるならば、メルロ＝ポンティは、間身体性を独断論的に定立して他我問題を消滅させようとしているのではなく、独我論と融合論との対立を乗り越え、多数性と統一性の両方を同時に思考することをめざしているのである。

要するに、我々が求めている思考は (・・・)、二重の意味いや多数の意味をさえ、ひとつの世界において分化＝微分化 (différencier) し、統合＝積分 (intégrer) できるような思考なのである。¹⁴⁾

肉は一でも多でもない。それはつねにすでに分節されつつある一であると同時に、つねにすでに統合されつつある多のことなのだ。分裂と接合の両者をはらむ、この思考しにくい関係のことを、晩年のメルロ＝ポンティは「キアスム」という言葉で思考しようとしていたのだろう¹⁵⁾。

さて、このような視点から、ラカンの理論を振り返ってみよう。ラカンはたしかに、離乳という感覚的な次元における一種の認識の出現を明るみに出した。しかしながらこの認識は不完全な認識として、すなわち欠如態として捉えられている。その結果、この欠如は、不完全性を補うために「全体性のノスタルジー」へと反転してしまう¹⁶⁾。要するにラカンはいまだ部分と全体、融合と分裂、一と多の二元論のなかで思考しているのだ。

それに対して、メルロ＝ポンティにおける感覚的な認識は、全体性と対立するような不完全性をいっさい持たないものである。それははじめからエゴイズムの独我論と愛の全体性との対立を超越しており、ある時は両者を独我論的に対立させ、ある時は融合的に結びつける。独我論と融合は肉の二側面なのである。

ラカンは母のイマージの問題を形而上学・神秘主義・全体主義などの批判と結びつけようとしているのであろうが、これらを批判するためには、個の多数性と感覚の全体性そのものの対立を乗り越えるような次元を、すでに感覚的な

次元に見いだすべきであったのだ。

さて、鏡像はこの母と子の連結の空間を拡大するようなものとして現れてくる。そのことが顕在化する、「侵入コンプレックス」を検討することになろう。

3. 侵入コンプレックスと他者のまなざし

侵入コンプレックスとは、幼児とその同類 (semblables) の想像的な「同一化」の過程において生じるものである。すなわち、6カ月から2歳の幼児が、他の幼児（多くは新たに生まれた弟）を前にしたとき、両者の年齢の隔たりの大きさによって、競合関係や照応関係がみられる。いずれにせよ、この段階ですでに「ライバル」、すなわち対象としての「他者」の認知がおこなわれているのだ。

ラカンによればこの現象は、「他者のイマージが、ある種の客観的な類似性 (ressemblance) によって、自己の身体の構造、とりわけその関係機能の構造に結びついている」(FM, 40-9) ことを示しているという。これは成人の嫉妬や兄弟関係の場合のように、攻撃性という否定として現れることもある。サディズムとマゾシズムのまじりあう、この主体の「二重化 (dédoublement)」(Ibid.) は、離乳の危機にその起源を持つものである。たとえば子どもが紐のついたおもちゃを投げたり回収したりして、母親の不在と帰還を再現する、フロイトの有名な例を想起すればよい。兄弟との関係は、この母親のイマージや死の欲望を再現するものであり、他者の身体への「同一化」に支えられているものなのである。

ここで援用されるのが、いわゆる鏡像段階 (le stade du miroir) の理論である。周知の通り、それは、まだ言葉も話さず、自己の身体を完全に統御してもない6カ月くらいの幼児が、自己の鏡像を前にしたとき、それを認知して満足げな振る舞いをする、という観察に基づいている。その意味をラカンは二つ指摘する。第一にそれは、「主体の現実」を構成するものである。鏡像は類似性 (ressemblance) の作用によって、身体の全体像を先取りすることを可能にし、すべての「対象」のモデルを提供する (FM, 40-10)。ただし、ラカンが別の論文で明確に述べているように、この先取りはけっして完結せず、「主体の生成には漸近線的にしか合一しない」¹⁷⁾。その結果、身体の現実はつねに知覚の解体にさらされてしまい、それは分身 (double) や身体の解体のファンタズムとして現れることになる。

鏡像段階の第二の特徴は、その情動的な側面である。幼児は鏡像を認知する

とき発見の喜びにみちた表情を浮かべるが、これは動物的な条件や衝動からのリビドーの解放に基づくものである(FM, 40-10)。

こうして「自己は、嫉妬のドラマにおいて他人と同時に構成される」(FM, 40-10)。鏡像の認知によって自己が成立する瞬間は、同時にはじめて他者が認知される瞬間でもあるからだ。言い換えるならば、先取りされる全体像と寸断という現実とのあいだの隔たりにおいてこそ、他者は「ナルシシズム的な侵入」を行う。したがって、想像的な同一化は、同時に「疎外する(alienant)」ものでもあり、他者との競合を本質的にはらんでいるものなのである。

この理論からメルロ＝ポンティが学んだこと、それは一言で言えば想像的な(imaginaire)次元が、自他関係の構成において大きな役割を果たしていることであろう。これはサルトル的な想像力論、他者論からの完全な脱却を可能にする。ここでメルロ＝ポンティが『見えるものと見えないもの』でおこなっていた、サルトル批判をざっと振り返っておく必要があるだろう。

サルトルの『存在と無』のなかでメルロ＝ポンティがもっともきびしく批判する点は、存在と無のあいだに、いかなる移行(passage)もないということである¹⁸⁾。たとえば無化(néantisation)としてのまなざしは、他者を「まなざされる存在」(être-regardé)に変えることしかできない。他方、他者のまなざしも、「自己の見られる存在(mon être-vu)」、すなわち自己の存在の対象化としてしか現れず、無化としての自己のまなざしと交わることはない。むろんサルトルは対自と対他をさまざまに交叉させ、関係を複雑化してはいるのだが、無と存在が概念として固定化されてしまっているために、以上の前提そのものは揺るがず、相互主観性としての愛は「実現不可能」¹⁹⁾だと結論されることになる。要するに、サルトル的なまなざしは、「二重化」を経験することができず、他者の「侵入」によって、おのれを変容することもできないのである。その結果、自己と他者とはけっして共同世界を創設することはできず、ともに「制度」を形成することもない。それは定義上禁じられているのだ。

それに対しラカンが、想像的な次元における、自己と他者の鏡像関係を、制度創設の原動力とみなしている。自己と他者とは、この想像的な次元において「同時に構成される」のであり、自他の非対称的な関係は、あくまで両者の同一化を基盤に成立するものなのである。

だが、メルロ＝ポンティは、ラカンによってサルトルをしりぞけようとしているわけではない。ラカンとメルロ＝ポンティの微妙な差異を見きわめるため、メルロ＝ポンティの一見ラカン的なテクストを検討することにしよう。

『世界の散文』という題で書かれていた未完の書の「他人の知覚と対話」という章で、メルロ＝ポンティは他者がまずは自己の鏡像的な分身としてのみ現れることを指摘した上で、次のような問題を提起する——「自己がそうであるこの全体性に対して、どのようにして外的な視覚がありうるのだろうか」。私が世界を眺めるとき、そこにあるのはあくまで私の世界であり、そこに登場する他者の身体も、自己の鏡像的な分身にすぎない。だが、ある瞬間に、この分身は私が投影する世界から逸脱し、「私ではない」観察者として登場する。このように「見ることを始めるなにか(quelque chose qui se mette à voir)を、私はどうやって見ることができるのだろうか」。言い換えるならば、私の投影としての分身は、いったいどのように他者として自己に現れ、おのれ自身のまなざしを獲得するのであるか。これがメルロ＝ポンティの問いなのである。

他者である自己(un moi qui est autre)がいる。それは、他処(ailleurs)に居て、私の中心的な位置を篡奪するものである。それが自己としての性質を引き出すことができるのは、あきらかに「自他の」係累関係からだというのに。²⁰⁾

我々はここで「ヘテロトピアのまなざし」と呼んだものに再会する。ヘテロトピアのまなざしとは、自他の鏡像的な関係に生じる初めの他者のまなざしである。それは正面から自己に対峙するものとして現れる他者ではない。そのような他者は、むしろ自己にとっての対象にすぎない。真に他者である他者は、自己の視界の端において、対象化できない分身として現れてくる。それは「弟のように似ている」分身であり、「それを凝視しようとしたら、かならず消え去ってしまうような」²¹⁾もう一人の自己なのだ。そして、それが対象化し得ないもう一人の自己であるからこそ、そのまなざしはもっとも強力に自己自身を脱一中心化し、その地位を篡奪しようとするのだ。

ヘテロトピアのまなざしは、この自己と自己とのわずかな隔りに滑り込む。他者が他人として自己に侵入してくるのは、まさにこのわずかな隔りを介してなのである。「他人との不思議な接合(articulation)がなされるのは、自己自身のもっとも秘匿されたところにおいてなのだ」²²⁾。

このようにメルロ＝ポンティが自己と自己との関係に、他者性の萌芽を見いだすとしても、これは独我論的な立場を意味しない。彼が示そうとしていることは、自己と自己との間のわずかな差異こそ、すべての経験的な他者以上に他

者であるような、根源的な他者性の経験の場であるということである。要するに、自己と自己との差異は、あらゆる他者たちとの出会いの根拠であり、自己の多数化の根拠なのだ。

だが逆説的なことに、この自己と自己との差異は、他者の目の届かぬ奥底に隠蔽されている内在性ではない。反対にそれは、可視的なものとしての身体の表面に露呈しているのだ。

私が身体を持っていなかったとしたら、また他者たちが身体を持っており、それによって私の視野に滑り込み、私の視野を内側から (du dedans) 多数化するのではないとしたら、私にとって他者たちもなく、他の精神もないことだろう。(・・・) 私の私自身との関係は、すでに一般性なのだ。²³⁾

身体は見ると同時に見えるものである、という晩年のメルロ＝ポンティのよく知られたテーゼは、他者のまなざしに身体がさらされている、という常識的な事実を確認するものではない。彼が示そうとしていることは、こうした「事実」としての他者の現前が可能になるのは、「身体の各部分のまわりに、可視性の暈 (halo de visibilité)」²⁴⁾ があって、これが他者のまなざしの切迫 (imminence) をテレパシーのように先取りしているからだ、ということなのである。他者のまなざしの切迫は、身体の表面に書き込まれている。身体の表面とは、見る身体と見える身体が「ひっくり返される手袋の指先」²⁵⁾のごとくに反転する蝶番であり、同時に、自己と他者との接合の場でもあるのだ。

こう考えるならば、メルロ＝ポンティの課題は、サルトル的な対象化的なまなざしが到来する (時間的・空間的な) 「場」そのものを捉えることだと言える。他者のまなざしがもたらす否定性や多数性は、この場に書き込まれ、感覚的な現前に「根付いて (enraciné)」²⁶⁾ いる。感覚的な現前は、この否定性や多数性を内在的にはらんでいるのだ。

この視点からラカン理論を振り返ってみるならば、彼がこの感覚的次元に根付いた否定性をじゅうぶんに主題化していたとは思えない。鏡像段階を記述する際に持ち出されているのは、やはり全体性と部分の弁証法である。すなわち、「離乳コンプレックス」が母のイマージとその不在との二元論で記述されていたのと同様、「侵入コンプレックス」も、理念的に先取りされるゲシュタルトとしての自我の全体像と、現実分裂している身体との二元論で説明されている。

主体が鏡像においてたたえるもの、それはそれに内在する精神的な統一である。主体がそこに認知するもの、それは分身のイマージの理想である。(FM, 40-10)

そして、先取りされる全体性と現実の分裂の二重性は、「我 (je) の精神的な恒常性を象徴すると同時に、その疎外化的な運命 (destination aliénante) を予示している」²⁷⁾ という。ラカンの意図に反し、この分析は疎外論的な要素を多く含んでいる。デリダが指摘しているように、概念装置の次元においては、ラカンの分析とサルトルの分析は案外と近いところにいるのかもしれない²⁸⁾。

サルトルとラカンの分析において主題化されていないもの、それはまさにヘテロトピアのまなざしである。それは、自己と自己との差異において、ほとんど感覚的・身体的に経験される他者の萌芽であり、自他の関係の制度化の根拠なのだ。だがこの萌芽や根拠は、単一で分割不可能な起源ではない。それはつねにすでに制度において分裂・多化している萌芽であり、反省作用によっても、神秘的な直観によっても捉えられない、底なしの根拠なのである。

4. ヘテロトピアのまなざしと制度分析

このようにメルロ＝ポンティの鏡像論は、ラカンから主体を越える制度的な次元の記述を学びとりながら、他者のまなざしの経験の現象学的な探求を深めることによって、サルトル的なまなざしの到来の場を説明しようとするものだと考えられる。むしろラカンの分析は、鏡像の分析にとどまるものではなく、むしろ「エディプス・コンプレックス」における「象徴的なもの (le symbolique)」の優位性というテーゼにつながるものである。この点について本稿で詳述することはできないが、メルロ＝ポンティにとって、「想像的なもの」と「象徴的なもの」、あるいは感覚的なイマージュと言語的な構造などのあいだの優位関係という問題は、それほど重要でないことは指摘しておいてよからう。ラカンがもし、想像的なものは、たんに象徴的なものに至る弁証法の動力にすぎないと主張するとするならば、メルロ＝ポンティは、象徴的なもののほうこそ、想像的なものにおける存在と無、自他のキアスムを平板化し、抽象化したものだとこたえることであろう²⁹⁾。また根源的なナルシズムは、たんに感覚的な次元にのみ確認されるものではなく、象徴的な次元にも見いだされるはずのものなのだ。要するに、感覚と言語、イマージュと象徴といった階層構造こそ、メルロ＝

ポンティが解体しようとしているものなのである。

だが本論の課題は、フーコーの鏡像分析の意味を問うことであつた。

メルロ＝ポンティの晩年の哲学は、一見したところサルトルとラカンとのあいだで、ほとんど神秘主義的な思弁に下降して行くかのように見える。だが鏡像の無限の反照関係に閉じこめられたかのように見える彼の分析は、じつはフーコー的な制度分析と深いところで通底している。メルロ＝ポンティが身体感覚の現象学的分析の果てに遭遇した他者のまなざしは、まさに制度における自他の関係を創設するものであつた。従つて、彼の晩年の存在論は、まさに——言語制度や社会制度などを含めた——、制度のあらたな分析を準備するものとして捉えかえされるべきであらう。

他方フーコーは、ほとんど構造主義的な制度分析から出発しながら、ヘテロトピアの空間と呼ぶものの根拠を、鏡像におけるまなざしとの出会いとして記述することで、メルロ＝ポンティと交叉していく。ヘテロトピアの記述は、たんに社会学的な構造分析にとどまるものではない。ヘテロトピアとは、制度内における他者の現れの間である。だがこの他者は、マジョリティに単純に対立するマイノリティなどではない。このようなものは、マジョリティの否定的な鏡像としてのユートピアにすぎないであろう。それに対しヘテロトピアは、制度が自己自身とナルシス的に関係することによって、内側から外部への境界を開いてしまうような場なのである。それは制度がいわば内側にねじれることで歴史的・地理的な歪みをはらんでしまうような場であり、制度の——起源なき——生成の運動の場なのだ。だからヘテロトピアを客観的な対象として記述する学問などは、成立し得ないだろう。それはつねに制度の内的な襞において、分析のたびごとに、新たに創り出されなければならないのだから³⁰⁾。

注

- 1) Michel Foucault, "Des espaces autres", in *Dits et écrits*, t. IV, Paris, Gallimard, 1994, pp. 755-756.
- 2) *Ibid.*, p. 756.
- 3) Maurice Merleau-Ponty, *Le visible et l'invisible*, suivi de *Notes de travail*, Paris, Gallimard, 1964, p. 312. (「サルトルのような歴史哲学に対立させるべきものは(・・・)地理学の哲学ではないだろうが(・・・)構造の哲学である。これは、実は歴史学よりは地理学とすり合わせたほうがうまくできるような哲学である」)(以下注においてVIと略記して頁数を記す)。
- 4) VI, 325, 183.
- 5) むろんラカンの立場はその後発展し、とりわけ『セミネール』の名で知られる講義はフーコーにも影響を与えたのだが、本稿では鏡の分析の哲学的意味を探ることに集中するため、あえて(自己矛盾を内在化しながら)高度化していくラカン理論を追跡することはしないことにする。
- 6) *Merleau-Ponty à la Sorbonne, Résumés de cours 1949-1952*, Grenoble, Cynara, 1988, pp. 106-117, 318-321; Jacques Lacan, "La famille", *Encyclopédie française*, Tome VIII, 1938, pp. 40-3~42-8; repris comme *Les Complexes familiaux dans la formation de l'individu*, Navarin Editeur, s. l., 1984; "Le stade du miroir comme formateur de la fonction du Je", in *Écrits*, Paris, Seuil, 1966, pp. 93-100. "La famille"論文については、本文でFMと略記し、オリジナルのフランス百科事典版の頁を記す。
- 7) VI, 324.
- 8) Cf. VI, 321.
- 9) Cf. VI, 322.
- 10) VI, 270.
- 11) Merleau-Ponty, "Le philosophe et son ombre", in *Signes*, Paris, Gallimard, 160, pp. 221-222.
- 12) Cf., VI, 112.
- 13) Cf. VI, 39, 192, 320.
- 14) VI, 125.
- 15) Cf. VI, 315.
- 16) Cf. VI, 114.
- 17) Lacan, "Le stade du miroir...", p. 94.
- 18) VI, 112, 317.
- 19) Jean-Paul Sartre, *L'Être et le néant*, Paris, Gallimard, 1950, p. 433.
- 20) *La prose du monde*, Paris, Gallimard, 1969, p. 187.
- 21) *Ibid.*, p. 186.
- 22) *Ibid.*, p. 188.
- 23) *Ibid.*, p. 192.

- ²⁴⁾ VI, 298.
- ²⁵⁾ VI, 317.
- ²⁶⁾ “Le philosophe et son ombre”, p. 217.
- ²⁷⁾ Lacan, “Le stade du miroir...”, p. 95.
- ²⁸⁾ Jacques Derrida, *Résistances — de la psychanalyse*, Paris, Galilée, 1996, p. 74.
- ²⁹⁾ むろんメルロ＝ポンティは、感覚的・身体的な次元から、言語的・象徴的な次元を演繹できると主張しているわけではない。この点については、メルロ＝ポンティの言語論そのものを検討する必要がある。拙論、「制度・出来事・構造—メルロ＝ポンティ制度化概念の射程」、東京大学教養学部『教養学科紀要』、n° 26, 1994, pp. 59-80 参照。
- ³⁰⁾ Cf. VI, 312 「時間と空間の同時的な根源的創設 (Urstiftung)、これは歴史的な風景 (paysage historique) と歴史のほとんど地理学的な登記をあらしめるものだ」。